

府中町あるさと歴史散歩

〔第31回〕

文化財としての地名⑩ 昭和初期の町内会名(6) 茂陰

昭和初期の頃の字名は古い歴史に基づいた所が多く、現在も生き続いている。

今回は「茂陰」について考

えていくこととする。

(6) 字

茂陰

「この茂陰という地名の起りは明らかではない。茂陰とは府中大川の近くということである。街道沿いに松が植えられてよく茂り、旧山陽道（西国街道）を行き来する旅人が、松の木の陰で休息するのが丁度よかつたため、この地名が呼ばれるようになったのだろうか。なお、この“茂景”という地名が初めて史料に出たのは文化12年（1815）に出された国郡志下しらべ帖からである。」（菅原守編『芸州府中荘誌』から 筆者が口語訳したもの）

「字 茂陰」地区を現在の住居表示で示すと、茂陰二丁目、

二丁目と大通一丁目、二丁目、三丁目の西半分辺りで榎木川とその下流の府中大川に沿った地域である（地図①参照）。茂陰の地名の由来については、つきりとした説がない。古い史料をみると「茂景」「茂影」と表記されているが、明治35年発行の5万分の1地形図では「茂陰」と表記されている。鎌倉時代以前のこの地域は茂陰山の部分を除いて広島湾の一部であつたとされている（地図②参照）。長い年月をかけて府中大川が運搬する土砂の堆積作用の影響を受け、海岸線が沖合いに変化していくとともに、自然に堆積された土砂を基盤として、慶安元年（1648）年には「茂景新開」として開墾され陸地化されていると史料からうかがえる。ただ、誰がどのようにして開墾したという詳しい史料

は残っていない。

茂陰地区から県道を西へ向かう橋を府中大橋といい、通称「土橋」と呼ばれている。

（一般的に「土橋」とは木橋の橋面を丸太で作り、上を土でならした簡易的な橋のこと）を意味する。この橋の原形は元文5年（1740）に出来られた『府中村諸橋仕出帳』によると「往還橋」とさ

れています。この後、府中大川の氾濫等により、数回の架け直しを経て、現

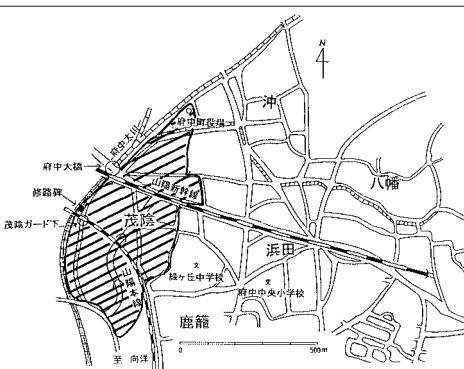
在の府中大橋（写

真①）の姿になっ

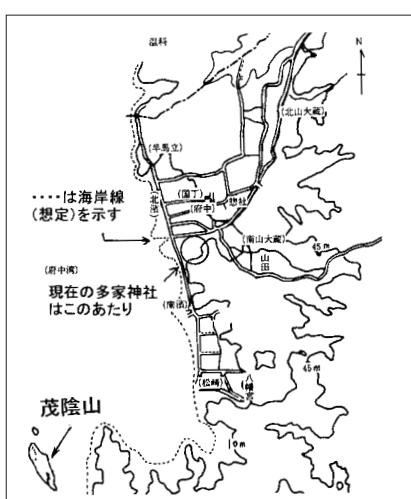
たのは、昭和50年（1975）であ

問い合わせ

教育委員会生涯学習課
☎ 286-3272
府中町文化財保護審議会委員
熊野俊浩



地図① 「字 茂陰」(■の部分)とその周辺図



地図② 鎌倉期の府中と地名推定図
〔『安芸府中町史』第1巻から〕

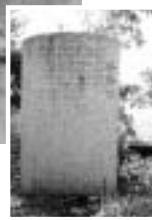
的な渋滞を引き起こしている。当時の府中大橋（写真②）の架け替え工事によるものである。また、山陽本線の茂陰方下の近くには「修路碑」がたてられている（写真③）。これは明治19年に千代山・茂陰山の山裾を通る道路の15町（約1.6 km）を仁保島村の沢田七衛門が自費200円を投じて道路改修工事を行つたことが記されている。



写真① 現在の府中大橋



写真② 昭和48年頃の府中大橋（写真左側に工事中の現在の橋がみえる）



写真③ 修路碑